

# 遠軽町と「1964東 ～北海道家庭学校「展示

# 京五輪の森」 林」のストーリー～

◀北海道家庭学校の展示林

さまざまな不安を抱えながらも、いよいよ開幕を迎える東京五輪。前回、1964年大会ゆかりの「緑のレガシー」が遠軽町に存在することを、ご存知だろうか。当時、各国代表団が持ち寄った種から育った木々が、「オリンピック展示林」として町内の北海道家庭学校で大切に守り育てられて

いるのだ。町ではこの貴重な財産を未来につなげるべく、オリパラ終了後にイベントを計画しているという。遠軽町を訪れ、関係者から展示林に関するストーリーを聞いた。

(フリーライター・内海 達志)

## ミュージアムの「遠軽町」

遠軽町の展示林のことを知ったのは、2019（令和元）年にオープンした日本オリンピックミュージアム（東京都新宿区）を見学したのがきっかけだった。館内の天井や家具に遠軽町の木材が使用されており、これらは北海道家庭学校にある展示林のもの、という説明があったからだ。東京五輪の歴史を伝える木は、近代的な空間

のなかで、来館者を包み込むような温もりを醸し出していた。

前回の東京五輪時、国土緑化推進委員会の呼びかけに応じ、44カ国から272種類の種子が寄せられ、全国各地に配られた。北海道は、寒冷地に適応した主に北欧の種子が農林水産省林木育種場（江別市）と北海道林業試験場（美唄市）へ寄贈され、そこで幼苗とな

ったものが、1968（昭和43）年、北海道家庭学校で植樹された。植樹から半世紀以上が過ぎ、現状、しっかりとした形で木が残っているのは、遠軽町と選手村があった代々木公園のみとされる。苗木を育てるのは容易ではなく、自然災害や人手不足など、諸々の要因によって頓挫したケースも多いようだ。

筆者は東京五輪開催

が正式決定した2013（平成25）年の秋、代々木公園の「東京オリンピックピック樹木見本園」を歩いたことがある。そのときは「オリンピックピック展示林」が遠軽町にあることなど知る由もなかった。

見本園の正確な本数はわからないが、種の提供国には、旧東ドイツ、旧セイロン、イラク、パキスタン、アフガニスタンといったレアな国名もみられ、非常に国際色豊かであったのを思い出す。

## 秋には植樹イベントも

実際に展示林を見たくなり、緊急事態宣言明けに遠軽町を訪れた13・3万鈴の町域のうち、森林面積が11・7万鈴を占める。石北線の各駅停車に乗ると、窓から森の匂いが流れ込んでくる。

アムに町の木が使われたことについては、「嬉しかったですね。内外の五輪関係者もよく視察に来られるようですが、スタッフが「遠軽の学校で育った木が……」と説明してくださるので、遠軽の知名度が高まったのではないのでしょうか」と話す。

学校を訪問する前に、まずは町役場で経済部農政林務課の廣瀬淳次課長と中島清道主幹に話を聞いた。ミュージ

ちなみに、遠軽町の木材は、選手村に仮設



遠軽産の木材が異彩を放つオリンピックミュージアム▶



代々木公園の見本園 (提供・代々木公園CS)▶

▲種まきをする子どもたち



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)